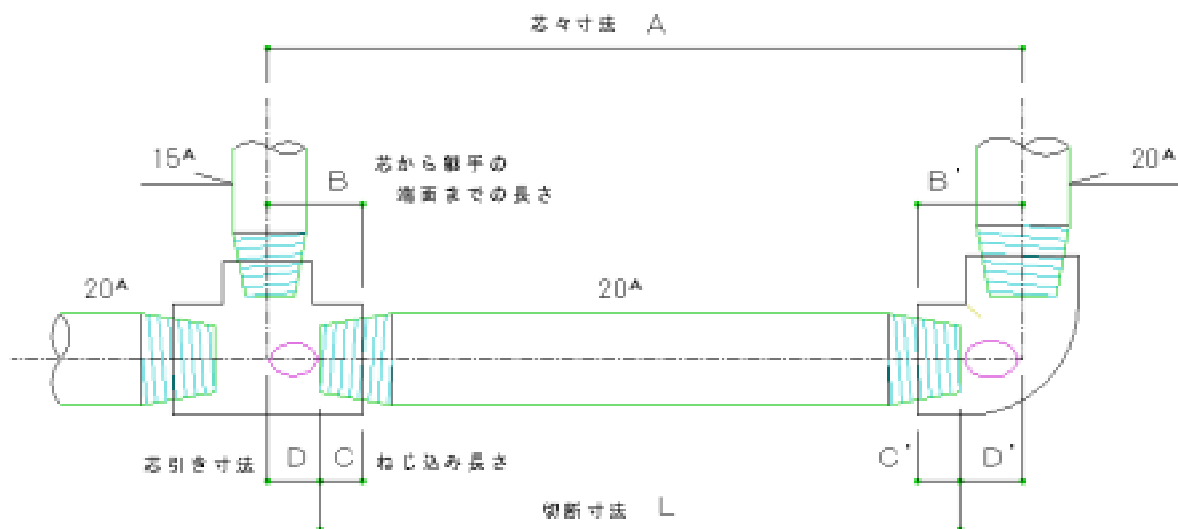


切断寸法の求め方

配管とは、管と継手を接合し、決められた寸法にするものである。
 決められた寸法にするためには、下図の の部分に空間があることを理解しなければならない。
 この空間があるため、管は決められた寸法よりも必ず短くなる。
 どのくらい短くすれば良いかを下記に示す。
 尚、下図は鋼管の例であるが、銅管、塩ビ管も考えは同じである。



鋼管の接合図

芯々寸法 A

管の中心（芯）から管の中心までの長さ。図面にはこの寸法が書かれている

芯から継手の端面までの長さ B

現物の寸法を計測する

ねじ込み長さ C

正しいねじであれば管径により決まっている

15 A 11 mm
 20 A 13 mm

芯引き方法 D

芯から継手の端面までの長さ - ねじ込み長さ
 (B) (C)

切断寸法 L

管のみの長さ。下の式により求める
 芯々寸法 - 片方の芯引き寸法 - もう一方の芯引き方法
 (A) (D) (D')

例

上の図のような継手の組み合わせで芯々寸法 A が 300 mm の時の切断寸法 (L) を求める

1. 図面左側の 20 × 15 L の芯引き方法 (D) を求める
 $D = (B) - (C)$ なので
 B) を計測 (B) = 29 mm
 C) のねじは 20 A なので (C) = 13 mm
 $D = (B) 29 - (C) 13$
 $D = 16$ となる

2. 図面右側の 20 L の芯引き方法 (D') を求める
 $D' = (B') - (C')$ なので
 B') を計測 (B') = 32 mm
 (C') のねじは 20 A なので (C') = 13 mm
 $D' = (B') 32 - (C') 13$
 $D' = 19$ となる

3. 両端の継手の芯引きがわかったので切断寸法 (L) を求める
 $L = (A) - (D) - (D')$ なので
 $L = (A) 300 - (D) 16 - (D') 19$
 $L = 265$ mm となる